

## ■ 編集だより

### 編集後記

2018年6月に精神神経誌の編集委員を拝命して、まもなく1年になろうとしている。編集委員会に出席するようになって初めてわかったことがいくつかあるが、そのうちの1つに、毎号に掲載されている特集の論文(依頼論文)の選択方法がある。

精神科の専門医制度が始まった頃を境に、学術総会への参加者数が増え、規模も年々大きくなっていき、プログラムも充実してきた。以前より、会長講演、特別講演、招待講演、教育講演、シンポジウム、ワークショップなどの企画があったが、近年、特にシンポジウムやワークショップの数が増えてきた。本誌の特集頁は、ご存じのように、前年の学術総会のシンポジウムの内容をもとに組まれている。しかし、シンポジウムなどのプログラム数が増加している(通常の公募シンポジウムのほかに、委員会シンポジウムや会長企画シンポジウムもある)のに対して、本誌の1巻あたりの号数は12と固定されている。経費もかかるので、1号あたりの頁数も闇雲に増やすというわけにはいかない。1号あたりに企画できる特集は、1つか多くて2つということになる。おのずから本誌の特集として掲載されないシンポジウムも、数多く出てくることとなる。

編集委員となる前の私も、過去の学術総会において、何度かシンポジストを務めさせていただいている。執筆依頼が送られてきた時もあったが、待てど暮らせど執筆依頼がこないこともあった(そのうちに発表したことすら忘却していた)。その当時は、どのような基準で執筆依頼がくるのかを知る由もなかったのであるが、まあ誰かが適当に決めているのだろうとぐらいにしか思っていなかった。

自身が本誌の編集委員となって、ほぼ最初の仕事が、特集に掲載するプログラム(シンポジウム)の選定作業であった。昨年の学術総会のすべてのプログラム(かなりの量である)に対して、各編集委員が評価を行い、編集委員長のもと、参加の編集委員全員で議論をしながら選んでいく。その際に、例えば前年や前々年に類似の企画を特集として掲載した場合には、選から外す。マニアックすぎて読者がほとんどいないであろう企画に関するものも外す。すでに編集委員会から、他の原稿の執筆をお願いしている先生が入ったシンポジウムも、なるべく外す。このような作業が延々続いていく。掲載に値する内容か否かを確かめるために、実際に会場に向いて聴講された委員の先生もいらしたのには驚いた(ちなみに、満員で立ち見であったそうだ。編集委員の平均年齢は比較的高いので、長時間の立ち見は応える)。

こういった編集委員の努力(?)によって選ばれる特集企画の依頼論文であるが、残念ながら、依頼したすべての先生方に書いていただけるわけではない。期限までに原稿をいただけないこともある。二重投稿の可能性があるために辞退される場合もある。さまざまな理由で、掲載できないことがある。編集委員会から執筆を依頼された先生におかれては、以上の事情をお汲みいただき、数多のシンポジウムのなかから選ばれた関心の高いテーマであるというご自負のもと、ご執筆いただければ幸いである。

さて、毎年6月は日本精神神経学会学術総会の季節である。115回となる今年は、染矢俊幸会長、松田ひろし副会長のもと、6月20日から22日の日程で、新潟市の朱鷺メッセで開催される。今回も、たくさんの魅力的な企画が目白押しである。このうちのいくつかは、今後、本誌の特集として取り上げられるであろう。今までは、学会会場で船を漕いでいることが多かった編集子であるが、今年こそはしっかりと聴講しようと思う。会場で見かけたら、声をかけてください。

山田和男